

2010年1月25日 日本テレビ 定例記者会見**《 全文 》**

<発表>

細川知正社長：「NNNドキュメント」が、ついに放送開始40年となりました。この番組は、極めて多彩な話題を提供し、社会のいろいろな問題点を糾弾することを含めて、非常に良質の辛口ドキュメントで、長い期間きちんと全国ネットで放送してきたことは非常に良かった、放送を続けてきたことをぜひご評価頂きたいと思っています。

1. 最近の視聴率動向と編成戦略

記者：視聴率でノンプライムタイム1位を獲得した2009年を振り返って、どのように評価されますか。

舛方勝宏専務：日本テレビは既存のいわゆる視聴率の三冠王に加えて、午前6時から24時までの全日18時間からプライムタイムの4時間を引いたもの、これをノンプライムとして、合わせて四冠王と呼んでいます。私どもは番組の強さ、弱さを見るために、全日、ゴールデンタイム、プライム、ノンプライムという指標で見っていますが、ノンプライムは年間で5年ぶりに単独でトップを獲りました。一昨年はこのノンプライムがフジテレビと同率で首位でしたが、去年は0.1ポイント離して日本テレビが7.3%、フジテレビが7.2%、テレビ朝日が6.6%、TBSが6.0%でした。私どもとしては「ズームイン!!SUPER」、「NEWS ZERO」などの番組が、全日からプライムを除いた視聴率をどれくらい獲っているのか、この全日とノンプライムは非常に重要な局のパワーであると見ていますので、そういった意味では年間においてノンプライムでトップを獲れたことを評価しています。ノンプライムを含む3部門ではポイントを上げていますが、フジテレビに次いで2位ということで、1年間編成局や制作関係を担当して、フジテレビの強さがよくわかりました。その強さがよくわかった1年でしたが、ノンプライムで1位になったこと、他の3部門で2位ですが差を詰めているということで、1年間まずまずの合格点ではないかと思っています。

いわゆる四冠王争いについては、週ごとではフジテレビが年間で22回、日本テレビは5回と差はありますが、フジテレビは08年が27回でしたから、それを

阻止した回数が少し増えたことになります。ノンプライムは勝っていますので、これで全体を底上げしていこうと考えています。

いわゆるスポンサーニーズの高い層で見ますと、昨年1年間で驚くほど改善されたのが大きな特色だと思っています。いわゆる働き盛りの人を中心にしてどれぐらい視聴率を獲っているのか、視聴者はどれぐらい期待しているのかという意味では、20代から30代にかけての若い女性層が非常に重要であるとスポンサーも見ていますが、昨年はその層が前年から上がりました。例えば19時以降、20時以降、こうした層だけ調べますと、フジテレビに勝っている週もあります。これまで全く歯が立たなかった部分が、こうしたスポンサーニーズの高い層に関して06年から視聴者層の改善をしてきたことが昨年は実ってきたということで、相手を捉えそうかなというところまで来ている、これを維持しながらやっていきたいと考えています。

年度の視聴率は、現在全日は日本テレビが8.4%、フジテレビが8.5%、0.1ポイント差です。昨年私どもはこの時点では8.2%でしたが8.4%に上がっています。フジテレビは昨年と同じ8.5%です。プライムは12.4%、フジテレビは13.3%とその差は0.9ポイントと開いています。ゴールデンは12.3%、フジテレビは13.5%と、これも1.2ポイント開いています。ノンプライムは日本テレビが現在7.2%とトップでフジテレビが7.1%、それぞれポイントを上げています。年末年始の最終週53週に関しては、日本テレビは開局以来初めてこの最終週に勝ちました。ずっとフジテレビが最終週は勝っていた。06年からフジテレビがずっと連続して正月は四冠王を獲っていたのが、1月3日までの最終週に関しては、日本テレビが四冠王を獲ってフジテレビに勝ったということです。これまでの相手を避ける編成と異なり総力戦でぶつかったところ、ゴールデン、プライムともに2ポイント以上離してトップを獲った。こういう意味では積極的にやってみると、道も開けるということを実感します。ただ、1つのテストとしてやってみて、視聴率が獲れることが証明されたわけで、あとはレギュラー番組の拡大枠で獲っていますので、レギュラー番組の力が間違いなく上がってきたということです。

ドラマについては各局ともやや苦戦しています。日本テレビも「曲げられない女」がスタートは非常によく15.4%でしたが、2回目が11.0%でした。また土曜日の「左目探偵EYE」が初回8.5%でした。

一方、「SUPER SURPRISE」は4月の改編を待たずに1月11日からリニューアルスタートしています。これまで19時台は平均8.4%でしたが、1.4ポイント上がって9.8%になっています。

そして、今シーズンのプロ野球中継の数は、地上波で22試合、BS日テレで56試合、日テレG+で全72試合を放送します。この地上波22試合の割合は、ナイターが8試合、昨年12試合から4ゲーム減ります。そのかわりデーゲームが昨年より4試合増えて14試合。BS日テレは単独で42試合、地上波との重複分が14試合で合わせて56試合。G+は72試合で、やはりファンの開拓、青少年のファンを開拓していこうと、デーゲームを増やすことを決めました。

また、来週は「日テレ系 冬の大感謝祭」を編成します。映画「崖の上のポニョ」を初めて地上波で放送するほか、2月1日21時から「世界1のSHOWタイム～ギャラをつけるのはアナタ～」を島田紳助さんの司会で、新しいソフトとして放送します。また2月2日19時56分から「THE 料理王」、こちらは料理自慢のタレントさんが本気で戦うドキュメントバラエティです。

記者：2010年度4月改編はどのように展開されていく予定でしょうか。

舛方専務：大きな形は今検討中ですが、「SUPER SURPRISE」は1月にスタートした企画などをさらにリニューアルするかもしれません。フジテレビが19時台の民放では圧倒的に視聴率を獲っていますが、おそらく4月改編ではTBSもニュースに替えて新番組を投入してきます。三つ巴、四つ巴で数字が崩れる可能性がありますので、その中でも視聴率が獲れるソフトを私どもは考えています。

また土日は私どもが非常に強い曜日ですので、ここをさらに安定させていくのが4月改編のポイントとなります。

記者：ドラマ番組の2枠は、2010年も継続していきますか。

舛方専務：既存のドラマ2枠に加えて単発のドラマを組んでいきます。今後、松本清張さん原作の「霧の旗」、「書道教授」を予定しています。「霧の旗」は市川海老蔵さん、「書道教授」は船越英一郎さんの主演で、2週連続の松本清張さんのドラマを置く予定です。そして、山田太一さん原作のドラマを渡辺謙さんの主演で想定しています。渡辺謙さんは大変お忙しい俳優ですが、これはぜひともやりたいということで、非常に乗って頂いています。ドラマを3枠にする前に体力をつけるため、単発ドラマを製作していくことを新年度も継続していくつもりです。

記者：バンクーバー五輪での日本テレビの見所と、フジテレビがタレントを起用せずアナウンサーだけで担当しますがどう判断されていますか。

舛方専務：フジテレビがアナウンサーだけで放送するというのは、大変珍しいことです。日本テレビはアナウンサー、タレントの両方を起用します。嵐の櫻井翔さんは「NEWS ZERO」でスポーツ、ニュースなどいろいろ解説をしていますし、北京五輪でもメインキャスターを担当しています。トリノ五輪金メダリスト荒川静香さんは特に日本テレビを希望されました。恐らく各局などいろいろオファーがあったと思いますが、特に日本テレビでやりたいとおっしゃって頂きました。それから、荻原次晴さんもこれまでに日本テレビで五輪を担当して頂いています。もちろんアナウンサーも日本テレビの番組担当として鈴木崇司、田中毅、松尾英里子の3人を派遣します。

日本テレビは期間の前半に重点をおいて放送権を取りました。2月13日の開会式は録画放送ですが、18時から19時56分に放送します。また女子モーグル決勝は翌14日12時20分からで、これは皆さんお楽しみ頂けると思います。さらに男子フィギュアスケートは19日10時から14時15分に放送します。総集編、ハイライトは27日18時から19時56分までで、ここでまとめて早めに展開します。開会式をまず観て頂いて、ハイライトをじっくり観て頂く。昼間の競技もぜひワンセグ含めテレビをご覧頂ければと考えています。

記者：今年の巨人戦で中継時間の延長はどのように考えていますか。

舛方専務：開幕の試合は、もちろん30分延長を予定しています。3月26日の開幕戦、巨人対ヤクルトは17時50分から20時54分で最大延長30分。27日も同じカードで、19時から20時54分で最大延長30分と予定しています。

記者：NHKが朝の連続ドラマの開始を春から8時15分から8時スタートにしますが、日本テレビは何か編成上で考えていますか。

舛方専務：情報エンターテインメント局で当然対応の検討に入っていると思いますが、番組はそのまま「スッキリ!!」を変える予定はありません。視聴率も非常に好調ですので。

記者：「ズームイン!!SUPER」が初めてフジテレビ「めざましテレビ」に視聴率で抜かれましたが、4月に向けて対策などはありますか。

舛方専務：わずかでも抜かれるとあまり気分のいいものではありません。視聴者ターゲットの見直しを検討します。いわゆる男性の中間層の視聴者が少々離れている部分がありますので、それも分析しながら取り込みたいところです。そんなに悲観的に考えていません。本当に競っていますし、1%上か下かという幅の中で動いています。トピックや企画などで大きく変わるわけで、フジテレビが喜ばれているレベルの差ではないと思います。

2. 営業状況と放送外収入

記者：営業状況と放送外収入について聞かせてください。

細川社長：営業状況については、直近の状況と4月以降の状況ということになりますが、タイムセールスの直近の状況は、特に大きな変化はなく、昨年来の厳しさが続いています。

スポットセールスは昨年の9月から12月まで前年同月を超え、市況が好転したかとやや期待もしたのですが、1月はどうもそういかないようです。2月、3月は今のところ順調で、それなりの売り上げを期待しています。

4月のレギュラー番組のタイムセールスはまさにこれから始まる場所です。クライアントサイドの選別が激しいということがあり、簡単に次々継続が決まるような状況ではありませんので、丁寧な作業が必要になります。まだ4月に関しては、はっきりしないというのが実感です。

放送外収入に関しては、昨年11月後半ぐらいまで映画が非常に好調でした。12月の「ウルルの森の物語」と1月の「BANDAGE」は期待したほどではありませんが、健闘しています。

今年の予定は、4月に恒例の「名探偵コナン」のシリーズが上映されます。5月には「ズームイン!!SUPER」からの企画で「書道ガールズ」、これは大いに期待していますし、夏場にはスタジオジブリの「借りぐらしのアリエッティ」という大作が出ます。秋口になりますと「BECK」という音楽系の作品があり、今年も映画事業に関しては順調に進んでいくだろうと思っています。

一方、イベント関係は3月に2つ予定しています。横浜で開催する「ポンペイ展」と、渋谷で開催します「レンピッカ展」です。「ポンペイ展」は既に福岡で始まっていて、記録的な集客をしているようです。横浜でも大変期待をしています。

放送外収入のもう1つの柱である商品事業も12月から年明けにかけて、順調に数字を伸ばしています。総じて放送外に関しては、想定通りに順調に進んでいます。

3. 地デジの進捗状況

記者：地デジの進捗状況について聞かせて下さい。

細川社長：地上デジタル放送への完全移行は来年の7月24日までですから、ともかく今年1年が勝負の年であり、来年は残したところを仕上げる年ですから、今年ほぼ完成形にしなければならないと考え、そのためにあらゆることをやっていかなければならないと考えています。その中で12月の受信機販売の伸びは、実績で想定していたラインに戻ったようで、これは非常に心強いと思っています。

一方、都市部に多い問題点として、デジタル受信機が十分に普及しているにも関わらずアンテナの問題は必ずしも解決していない、または同じような意味で集合住宅に問題点が見えてきているということがあり、今年1年はこういった部分がメインテーマになっていくだろうと考えています。

私どもとしては、今年中に完成形までいかなければと考えていますので、この4月から、いわゆる「レターボックス」を拡大して、よりご理解と認知の拡大に努めたいと考えています。具体的には、4月以降、原則として生番組を除く全ての番組を「レターボックス」化して、地デジの普及に貢献していきます。その比率はおそらく全番組の2分の1を超えるのではないかと考えていますが、「レターボックス」化の強化によって、一気に認知度を高め、新たな2つの問題点の解決へ向かって、全力投球していきたいと考えています。

先般、石川県珠洲市でアナログ終了リハーサルを再度させて頂きましたが、あのような形で協力して頂いていることに大変感謝しています。その際に頂いたデータについても、大切に扱って、今後の対応の参考にしていきたいと思っています。

記者：「レターボックス」は野球中継でも実施しますか。

細川社長：野球中継でも実施します。生放送はまだ難しい部分がありますが、できるところから実施していきます。

4. その他

舛方専務：「NNNドキュメント」が放送開始40年になりました。1970年に「NNNドキュメント '70」という番組でスタートしました。私も第1回から3年ほど、この番組のナレーションを担当しました。当時、各局には相当力を入れたドキュメンタリー番組がありました。当社もこの番組に力を入れていたのを覚えています。

この番組は深夜ですが、「ネットカフェ難民」や「学級崩壊」「医師不足」などいろいろな社会問題を発信してきました。

記者：その「NNNドキュメント」ですが、20年前はまだ日曜日夜11時55分からの放送でした。この番組は日本テレビだけでなく、放送界で極めて評価の高い番組で、他局系列でもドキュメンタリーを作り始めたのも、この番組の存在があるからだと思います。しかも夜遅い時間にもかかわらず、3%から良い時で5%の視聴率を獲っています。ただ翌日のことを考えると、もうちょっと放送時間が何とかならないかと思うのですが。

舛方専務：深夜にバラエティ番組が増えてきて、ドキュメンタリーがだんだん遅い時間からの放送になっているのは事実です。もう少し早い時間の放送でも、私は十分視聴率が獲れるものであるとは思っています。大変緻密な取材をして、ネットワーク29局あげて絶対残したいと放送し続けてきて、ここまできたと思っています。確かにもう少し見やすい放送時間がいいですね。

記者：この20年間、何度も記事を書きましたが、放送時間がどんどん遅くなっています。

舛方専務：放送時間をもっと早くしたいという考えはいつも持っています。放送する曜日を変えることも、編成として考えてもいます。この番組は終わらせるつもりはありません。続けていきたい、50年続けたいと思っています。今ここまで丹念に事象を追っていく番組が本当に少なくなっています。各局ともそうです。

記者：この番組があるから、ネットワーク各局も制作力がきちんとついていますね。

舛方専務：この番組は続けていきます。「ネットカフェ難民」など、いろいろ注目されています。それは発信し続けていきたいと思っています。さらにいい形での放送を毎年考えています。

記者：「NNNドキュメント」をやめることを検討したのは視聴率が厳しかったからですか。

舛方専務：いろいろなニュース番組で特集を組む割合が増えてきたこともあります。例えば、「NNN News リアルタイム」や「NEWS ZERO」の中で企画する特集の放送時間が伸びてきた、枠が広がった。かつてのニュース番組のように、7分か8分のニュースで終えていく時代と変わって、番組の時間が増えてきたということで、特集を組める時間が増えたことも要因として1つあるかもしれませんが。視聴率よりも内容が少々重い、本格的に重いテーマを取り上げる番組です。わかりやすさよりも現象面を深く掘り下げていく番組で、「NEWS ZERO」などでの掘り下げ方とはまた違う作り方です。放送時間帯の問題もあって、本格的にやめることを検討したことはありませんが、どのように放送していくか、検討組上に載せたことはあります。ただ、きちんと重いテーマを深く掘り下げていく番組は時間をかけてやっていかなければならないということで、放送時間は遅いですが、続けているわけです。また、続けていかなければならないと思っています。

記者：民主党・小沢幹事長の土地取引をめぐる報道に関して、原口総務大臣が「関係者」という表現に「明確にしないと電波という公共のものを使ってやるには不適だ」という発言をしましたが、改めてどのようにお考えですか。

細川社長：原口大臣は発言された翌日いろいろ釈明をされていたりして、何が真意なのかいまひとつよくわからない。ご発言の内容はともかく、あくまでもニュースの取材源の秘匿は、大変重要なものであるという事を大原則として対応していかなければいけないと考えています。

記者：発言を受けて、表現を変えたこと、現場で対応を変えたことはありませんか。

細川社長：その必要はないと思いますし、ありません。ただ、どこから取材した内容か、出せる場合には出した方が視聴者に分かりやすい。可能な時は、いい加減な情報でないという意味できちんと出したほうがいい。それは大臣がどうお考えになろうと関係なく、その姿勢は堅持していきたいということです。

記者：原口総務大臣が、いわゆる放送局と新聞のオーナーシップに関して発言しましたが、どのような感想でしょうか。

細川社長：私どもは何に拠って放送しているかと言いますと、放送法に拠って放送しているわけです。オーナーシップや株主がどうということでは放送しているわけではありませんから、その発言でどうこうということは基本的にはありません。政府でご心配頂くようなことではないと思っています。

(了)